

速さで黒板いっぱい大きな字と精密な図をしたためるお姿に、大学教授の迫力を感じたものです。雪結晶の成長を計算機で再現する、木星の雲は下降気流内で作られるなどの講義は今でも記憶に残っています。そして先生は「まず始めること、始めたら終わること、終わったら書くこと」というファラデーの言葉を学生にさりげなく伝えるとともに、ご自身も多くの研究論文を執筆され、さらに気象庁の部内誌などにもユニークで機知に富んだ海外出張報告や随想などを残されています。

先生のお人柄に引かれて学生が連れ立って先生の宿舎にお伺いすることがありました。そのとき奥様が「観測船啓風丸の方からいただいた八丈島のおみやげです」とおっしゃりながら、大きなポリタンクから焼酎をポンプで各人のコップに豪快に注いで下さったことは、半世紀前の楽しい思い出です。

4学年の学生には卒業研究が与えられます。先生はご専門の氷晶核に関する理論や実験に関する研究をはじめとして、惑星大気に関する実験や植物発展にともなう地球規模の気候変動など、幅広くしかも学問的に高いレベルのテーマを学生に与え、研究の進め方、論文の書き方、さらに効果的な発表までを具体的に丁寧に指導して下さいました。

＜元気象庁長官 立平良三＞

気象大学校教授に着任された先生は、予報関係者の会合で、集中豪雨を雲物理学的に解釈する試みをよく話されました。予報側からの疑問点の指摘に窮しても、いかにも楽しそうに討論しておられたことは印象的でした。先生の観測部長への就任は、地球温暖化が注目され始めた時期であり、庁議でもよく議論されました。先生の自由闊達な発言は、議論の活性化に資することが大きかったと記憶しています。

＜気象コンパス 古川武彦＞

駒林部長のもとで仕事をしましたのは、私が管理課にいたわずか1年間でしたが、ずっと以前から日本気象学会でご一緒したことや「気象旧友会」の総会時などで数10年以上もお近くに感じていました。

部長は気象人には珍しい異色の人で、私は「駒林流」と評しています。万事に関心を持ち、熱心で、実践的、実証的でした。さらに社交的で、いつも笑顔が浮かべ、誰かが話をするとすぐフォローし、場が盛り上がりました。観測部内の風通しもよく、ソフトボール大会やバスをチャーターしての伊豆旅行など数々の楽しかった

思い出が浮かびます。

当時の管理課では仕事が終わった後にとどろき懇親会があり、他の課からの飛び入りもあって、まさに談論風発でした。ある時、地球温暖化が話題となりました。すると部長は、傍の黒板に地球の外殻を描き、「もし、南極大陸の氷が全部融ければ、海面はこのように約60m上昇します…」と白墨が折れんばかりの筆致で、計算を書き進められたのを記憶しています。どんな席でも笑顔を絶やさないう好漢でした。退庁後、時には有楽町のビヤホールに私たちと同行され、大きなテーブル上に全員が大ジョッキをずらりと並べたこともありました。

私は気象庁を辞した後、JICAによる技術協力プロジェクトでモンゴル気象水文環境監視庁(NAMHEM)に滞在しました。赴任するとすでにその前に部長が同様のプロジェクトで、モンゴル国立大学で教鞭をとっておられたこと、さらに首都ウランバートルで開かれた大ダンスパーティーに出席されていたことを知りました。60歳を優に超えて異国での授業とダンスと、まさに面目躍如の人でした。

部長は、その立ち振る舞いを通じて多くの人に「駒林流」を広めて来られました。今でも私の胸にはその薫陶が生きています。

5. 気象庁ご退職後

＜元JWA、元JICA 赤津邦夫＞

先生は気象庁を退官された後、JWAにお出でになり、本部や地方本部の事業・管理部門の総括的な長としてご活躍されました。私もJICAの専門家として多くの国に滞在していましたが、この間の先生からの年賀状にはいつも、あの崩すことのないがっちりとした漢字で、途上国気象局の指導を頑張ってほしい旨の短文が添えられていました。先生はきっと海外での指導をもっと行いたかったのではないかと思います。

＜JWA 飯田秀重＞

先生は、私がJWAに入社した時の事業本部長として面接官のお一人でした。研修中に昼食や歓迎会にご出席していただきお話をする機会がありました。研究発表会では、総評ですべての発表者に対して、コメントをいただいたことが大変印象に残っています。新入職員に対しても丁寧に助言をいただいたことに感謝しています。